原市場が生んだ偉人、山川兄弟

-郷土館収蔵資料目録７『原市場地区諸家文書目録』の成果を中心に-

はじめに

山川兄弟は、原市場が生んだ偉人です。長男の義太郎は日本を代表する電気学の権威者として『飯能人物誌』に掲載されていますし、弟の信次郎、弘毅もそれぞれ文学士、理学士として近代日本の第一線で活躍しました。

しかし、かつては学者一家として知られた彼らが、現在では半ば「知る人ぞ知る」に近い状態となってしまっているのは大変残念なことです。

そこで本シリーズでは「原市場が生んだ偉人、山川兄弟」と題し、主に収蔵資料目録の成果から、長男義太郎をメインに山川兄弟の足跡の一端を明らかにしていきたいと思います。

第一回「山川家文書と山川家の系譜」ではシリーズの導入として、山川家文書と現時点で辿ることのできる山川家の系譜について述べます。第二回「山川家の人々」では、幕末の動乱期における山川家の人々の動きと、本シリーズの核でもある山川三兄弟についてご紹介します。第三回「助教授時代の生活」は、義太郎が帝国大学工科大学(現東京大学工学部)の助教授を務めていた明治20年代後半について、残された手紙などをもとに明らかにします。第四回「工学博士山川義太郎」では、義太郎が研究者としての地位を確立して以降のことを、主に刊行物からみていきます。そして最後に番外編「古文書が語る郷土の歴史」として、山川家文書からわかる原市場地区の事について、少しご紹介します。

【第一回　山川家文書と山川家の系譜】

１　山川家文書について

『飯能市史』編さん事業を行っていた昭和50年代、原市場地区在住の郷土史家故西村一男氏より、山川家の土蔵を壊しているとの連絡が市史編さん係に入りました。現地に着くと既に土蔵は跡形もなく、土の上に古文書などが無造作に置いてある状態でした。それらを引き取ってきたのが、この文書群です。このような経緯で収集されたため、文書の中には足跡がついてしまっていたり、土で汚れてしまったりしているものがあります。

文書は全部で約750点。その多くが幕末から明治時代にかけてのものです。内容は、山川家が営んでいた質屋業に関するものや書簡、研究会の通知などが

主ですが、特に明治 20 年代、義太郎が帝国大学工科大学の助教授を務めていた時期のものが多く見られます。これに対し、下赤工村内部の出来事や村の政治に関わる文書など、一般に地方史料（じかたしりょう）と呼ばれるものはあまり残っていません。

２　山川家の系譜と質屋業　-江戸時代の山川家-

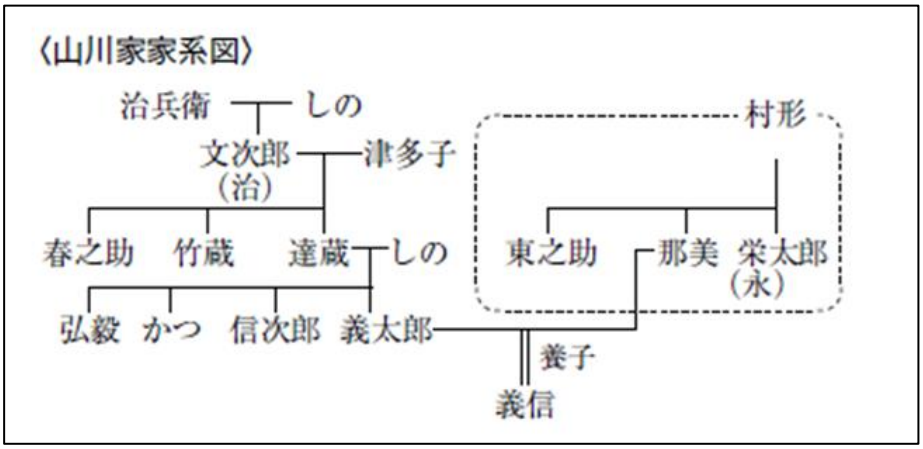
山川家の住居は下赤工村字竹際にあり、かつては入母屋切込み屋根を持つ瀟洒な造りとして有名でした。しかし、現在では取り壊されてしまっているため、その姿を見ることは出来ません。

文書群を見る限り、山川家の家系や由緒を書き記したものは確認できませんが、同家の人物名がわかる最も古いものとして、安永 6(1777)年に作成された香典の覚え書に「治左衛門」という名前を見ることができます(山川家文書№108)。しかし、同人についてはこの香典帳のほかに記録が無く、その詳細は不明です。

現段階で系譜を辿ることができる最も古い人物は治兵衛という人で、弘化 4(1847)年の宗門人別帳でその名を確認することができます(山川信一家№2。山川信一家は今回目録に収録した山川家とは別の家です。)。そこに記されている年齢から計算すると、彼の生まれは明和 9(1772)年頃になります。ここから推測すると、先ほどの治左衛門は治兵衛の父親であると考えられます。

治兵衛の名前は安政(1854～1860)年間まで見られますが、弘化 4 年の時点で山川家の当主は既に息子の文次郎となっています。墓誌によれば、文次郎は享和元(1801)年の生まれで、明治 16(1883)に亡くなっています。

江戸時代の終わりごろから明治時代のはじめにかけて、山川家は「竹際屋」という商号で質屋を営んでいました。「竹際」は山川家の住居があった字の名前ですので、商号もここから取ったのかもしれません。文書群の中にも、質屋業に関するものが天保(1830～1844)年間から明治 10 年前後まで 50 点ほど残されています。このうち、作成者が判明している史料については全て文次郎によるものとなっているため、質屋業は文次郎が中心となって担っていたと考えられます。



-第２回へ続く-